Ⅵ「2012 年　被災地体感ツアー」

当初の支援活動から、ずっとパートナーとしていつも行動を共にしてくれるKさんは、中大昭和43 年卒の大先輩。その同窓会の 7 月 7 日総会での齋藤の「被災者支援講演」を前に、幹事の皆さんが、「まず、話を聞く前に現地を知らなきゃ」と企画したツアー。私以外は全員中大卒業生の中、ガイドとして同行。この経験が、のちの同年 10 月「気仙沼大島被災地体感ツアー」、2013 年秋の同ツアー、2014 年 1 月岩手じぇじぇじぇツアーのモデルとなった。

①7月1，２日　中央大卒業生「白門４３会幹事」体感ツアー

【当時のK氏のレポート】

今年の七夕総会時の講演テーマの１つに、東日本大震災のボランティア活動が取り上げられることになり、ならば事前に見聞したいとの要望が役員会の後の飲み会で話題になった。そこで昨年７月から被災地支援を続けて現地に赴いている私が、企画して役員の皆さんに呼びかけることになった。 「東日本大震災体感ツアー」は、総会の１週間前の７月１日・２日に実施。梅雨時で天候が危ぶまれたが、１日曇天の新宿駅西口を７時３５分に１９人のメンバーで出発。マイクロバスの運転は、杉並区のボランティアで現地にもマイクロバス運転経験のある会員の富田秀雄氏が快く引き受けていただいた。ガイド役のナビゲーターは４３会メンバーではないが、私と被災地に１０数回マイカーで行ってよく現地を熟知している斎藤大介氏に依頼。
出発してすぐ私から皆さんへ、＜今回のバス旅行は物見遊山の気持ちは慎むように＞＜現地で被災者との対話で心無い言動に注意すること＞の２点お願いした。後は斎藤氏が饒舌豊かに、自ら作成した１３頁にわたる「旅のしおり」を解説し、車中あきさせないように＜三陸とはどこか＞＜リアス式とは＞などのクイズも飛び出した。途中２回の SA トイレ休憩で、石巻河南 IC を出てから石巻市内で最大の被災地南浜・門脇地区を車窓で眺めた。本来あるべきて建物がなくなり、山済みされた車や瓦礫の光景にため息をつくばかり。

１時半女川町のホテル「華夕美」で遅い海鮮丼の昼食をとった。

食後「女川地域医療センター」にて２人の被災体験者の話しを聞いた。被災当時は町立病院と呼んでいた海抜１６ｍの高台にある建物は、津波が病院の１階まで来て避難してきた町民が車ごと流されところだ。皆この高台に立って、ほとんど平坦な基礎部分のみと変貌した街並みと、津波がここまで到達したことが信じられないと実感した。体験談は、ライブハウス兼自宅が流されたが、地震直後近所の足の悪いおばあさんをつれてこの病院に避難してきたマスターと、歯科医院を自宅で開業していて、治療中の患者数名を連れて避難し、自宅とともに愛用のフルート 30 本も流された石巻市民交響楽団副団長の体験談は、より切実でその当時の緊迫感が伝わった。

予定時間をはるかに超して３時半、女川を後にして、硯の名産地雄勝町を通り抜け、あの石巻市立大川小学校へ到着。２階建ての校舎は見るも無残、児童 108 人中 74 人、教職員 11 人中 10 人が死亡・行方不明の悲劇。地震直後＜裏山に逃げよう＞＜いや山崩れが心配＞等で、結局高い橋のほうへ列を作って出発した直後に、４ｋｍ先の北上川河口から大津波が遡上してきて、すべてを飲み込んでしまったのだ。いまだ献花が絶えない祭壇に手を合わせて冥福をお祈りした。

　その後、南三陸町へ。取り壊しの最中で、７４人が犠牲となった志津川病院前のスタンドで燃料補給中に、明日の新宿到着時間を逆算すると時間が足りないとの発言があり、急遽明日見学予定を変更しての町防災センターへ。ここは、最後まで防災放送で避難を呼びかけ続けた遠藤未美さん他２３人が亡くなったところで、祭壇には多くの花束や千羽鶴が供えられていた。

（これのみ以前訪問時の写真です）

　すぐ近くに今年２月にオープンした「南三陸さんさん商店街」で買物支援をして、今宵の宿、歌津の「ニュー泊崎荘」に６時過ぎ到着。被災地のホテルや民宿は長期的に滞在する瓦礫処理等の工事関係者でほとんど占有され、一般の団体客の予約を確保するのに苦労した末にやっと取れた民宿だ。部屋割り後一風呂浴びて７時から宴会。

席上に倉田会長の親戚で歌津の小野寺葵さん（写真左）をお招きして体験談を聞いた。近所の床屋さんがすべてを映像に記録したＤＶＤが上映され、自宅がそっくり流される映像は、小野寺さんにとって大変つらいお気持ちだと感じた。幸い身内に亡くなられた方はいらっしゃらなかったが、３日後に自宅跡地に行き、愛犬が鎖につながれたまま溺死していたという話は、思わず目頭が熱くなった。宴会後幹事部屋で 11 時まで２次会後、床についた。

　翌２日、夜半から続いていた土砂降りの空も小降りとなる中、我々が６時半朝食をとるときには、同宿していた工事関係者はすでに済ませ現場に向かうところだった。せわしい時間に追われながら７時、再び富田氏に運転を委ねて、気仙沼のフェリー乗り場に向け出発した。月曜日通勤の車で幹線道路の渋滞が気がかりだった。海岸沿いを走る気仙沼線が無残な姿で残り、気仙沼市内に通勤・通学する交通手段は車だけが頼りのため仕方なかった。

　予約していた８時４０分発の気仙沼大島行きのフェリーに乗船。幸い雨はほとんどやみ、デッキから津波と重油タンクの引火で火災に遭遇した市内を眺めながら、３０分ほどで大島の浦ノ浜に接岸した。波止場で待ち受けていたボランティアガイドの案内で、ロープウェーが破壊され

状態のため、マイクロバスで「亀山」頂上に上った。

天気がよければ気仙沼から南三陸方面の美しいリアス式海岸や、遠くは金華山まで眺望できる観光スポットとして、親しまれているところだ。残念なことに全くガスがかかってしまい島にいながら海すら見えない状況で、ガイドも申し訳なさそうに案内していた。人口 3,000 人の島で、気仙沼市内から火災瓦礫が漂着して、森林火災発生で島の１割を消失したとのこと。ロープウエイのゴンドラも、終着駅で被災、炎上した。（写真）

次に島の最南端の龍前崎へ。島に打ち付ける荒波がまるで龍のよう、が命名の由来との説明。１１時半に昼食処「はま屋」に到着。フェリー乗り場近くで食堂を営んでいて、車で津波に追いかけられながらかろうじて高台に逃れることができたご主人、昨年１２月場所を変えて「はま屋」を再開した。ご主人や、食事に来店した地元の元小学校教師らの被災体験を聞いた後、フェリーに乗船する頃には晴れ間も見え出したが、亀山頂上からの眺望逃したことが心残りで、必ずもう１度来ようと心に決めた。

　気仙沼エースポートで下船後、「お魚いちば」でそれぞれは破格に安い鮮魚やお土産を購入。

最後の見学地として、TV などでもよく放映された大型漁船が座礁した市内鹿折地区へ到着。こんな巨大な漁船が海岸から数キロはなれたところに打ち上げられた現実。思い思いに写真を撮とって見納めとし、一路帰京のバスとなった。

東北道一関 IC に３時前に入り、途中のトイレ休憩制限１０分、夕食も２０分の限定で、富田氏は運転代わりもなく１人でがんばってくれ、新宿駅西口に予定の９時に無事到着できた。富田氏とガイド役の斎藤氏に改めて感謝申し上げます。

②１０月２０～２１日　被災地体感ツアー

【当時のレポート】

首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉）から 24 名が参加、石巻、女川、南三陸町、気仙沼を巡る一泊２日の体感を通じ、改めて、被災地の復興には程遠い現状に触れ、今後も継続的な支援の必要性を肌で感じました。以下報告いたします。

１０月２０日（土）

午前７時半　新宿出発

新宿駅西口の東京モード学園前に集合。保険加入の各自サインを終え、７時 30 分出発。首都高混み、東北自動車道も渋滞情報で、急遽、常磐道経由東北自動車道へ。まず、２日間の訪問行程概要、各地被災状況などの全２４ページ「旅のしおり」を配布。７７歳から 20 歳までの参加者の多くは初対面同士だが、車中では、自己紹介やクイズなどに加え、講談師神田京子さん、さすがプロ、の「忠臣蔵」一席もあり、車内大いに沸き、会話も弾む。

「３１１　有志」のバス

神田京子さんの講談

午後２時　石巻市内の中華料理「揚子江」にて昼食。

予定より一時間遅れの昼食。石巻のボランティア蟻坂さんや石巻市民交響楽団足立団長夫妻から自己紹介や被災以降の活動、料理店店主（中央若い女性）から、津波被災から半年後に営業再開までの苦労や今後の営業継続の不安なども話してもらった。

石巻のボランティア蟻坂さんの話聞く

レストラン社長の被災体験談聞く

食事後、最も津波被害の大きかった「南浜・門脇地区」をバスで通過。一面、荒野の中に、僅かに残る建物の残骸に、津波の威力を知る。さらに日和大橋を渡り、津波浸水した「湊地区」を通過。製氷庫や冷凍庫、加工工場の復旧が目立つのは幸い。一路、女川へ。途中の「万石浦」は、海岸沿いにもかかわらず、昔ながらの家々や線路。湾の入口が狭く、津波が侵入できなかった。

午後３時半　女川「地域医療センター」にて、被災者より説明

女川市内へ入ると、情景は一変。海からは遠い山合いの家々も土台のみ。高台にモダンな病院。「地域医療センター」（旧町立病院）だ。そこで、地元の開業歯科医Ｋさんより、被災状況の説明を聞く。「海抜 16mのセンター駐車場は車で避難した人たちで埋まっていた。しかし、津波が後方から襲い、車ごと流された。」という状況を、駐車場で聴き、センター入口玄関の柱には、２m近くの津波を示す印を見る。参加者は唖然。信じられない高さ。

Ｋさんから説明聞く参加者

左（薄茶色）が製氷庫。右奥（白）が冷凍工場

木村さんが指差す方向には、７月と 10 月に建ったばかりの製氷庫と冷凍工場。前者は、中小企業庁の復興資金３億。後者は、カタール政府からの２０億の援助。政府の復興予算のムダ使い糾弾！中東の国に感謝！である。ただ、漁船、加工工場も少なく、漁業復興はまだまだ、の観。なお、木村さん自身は、地震直後に、患者を帰らせ、車で山の中腹の体育館へ避難し無事。センターの足元にあった医院兼自宅は、津波で、フルート 30 本とともに流される。石巻市民交響楽団副団長。今もセンター内で仮設歯科医として働くながら、土日は、被災者を集め、様々な音楽コンサートを開催。当日は、長岡からのオカリナ楽団演奏会をセンター２階で開催していた。

午後４時半　雄勝町を通過

硯の産地で有名だった雄勝町を通過。町は奥まで壊滅しまま。１月まで公民館屋上にあった大型観光バスは、まだ地面に置かれている。ちなみに、出荷直前だったスレート板が、工場・機械とともに津波で流されたが、奇跡的に 7 割が残り、ボランティアの助けで一枚一枚洗い、このほど新東京駅の大きな屋根に葺かれた。そして大川小へ。

午後５時　石巻市立大川小学校にて、黙祷・献花

児童１０８名中７４名、教職員１１名中 10 名が死亡、または行方不明の現場。

夕暮れの中、着くと、２つの若い女性たちの団体が先にいた。ひとつはジャージ姿、ひとつは、介護師の団体。何人かは涙を浮かべ、黙祷していた。我々も花で埋まる祭壇に献花。

遥か先で重機が動いていた。いまだ５人の行方不明者の捜索だ。今回のツアー参加者の中には、９月中旬、「ご遺体捜索のボランティア」で参加された方も。

午後６時　南三陸町防災センターにて、黙祷・献花

最後まで避難を呼びかけた遠藤未希さんら町の職員２３人が亡くなった現場。あたりはほとんど灯りもなく、一面真っ暗。懐中電灯を頼りに、足元を照らすと、水たまりがあちらこちらに。ここでも、黙祷、献花する。輝く星空に、「綺麗だなあ。」と感嘆の声。でも、しかし、この星空を見上げるたびに、星ひとつひとつの輝きの中に、家族や知人の犠牲者の顔を思い浮かべ、悲しみに暮れている方々がいるのだろう、と想うと、いままでの星空とは全く違って寂しく見えた。

午後６時半　南三陸町歌津の民宿「ニュー泊崎荘」到着

風呂に入るなどして、７時半より夕食。しかし、「宴会目的」ではない。会場で、歌津大橋が流される津波のＤＶＤを上映。当初は何気ない漁港と町の風景の中で、上記防災センターから流れる「津波に注意してください」のアナウンスが響く。遠藤さんの声だ。しかし、数分後、徐々に水かさを増し、気付けば、水量は高い歌津大橋を超え、道路の反対側からも津波が濁流となって押し寄せ、町は完全に水没し、引き潮で家々がどんどん流されていゆく。参加者からは、このＤ

ＶＤを是非欲しい、との声相次ぐ。また、給仕する女性や、宿の女将からも、３．１１とその後の苦労を聴く。夕食後、ひと部屋に大半が集まり、初対面同士の交流会。ようやく各自くつろぐ。

夕食会場でのＤＶＤ上映に見入る

朝、全員で記念撮影

１０月２１日（日）

午前８時 40 分　フェリーにて気仙沼大島へ渡る

６時半から朝食、７時 20 分民宿を出発。気仙沼エースポートよりフェリー乗船。

出港すると、虹が見送り

気仙沼大島支援を続けている埼玉県三郷市のボランティア保田さんがセッティングし、ここから同行。昼食をとる旅館の主人がガイド役。旅館のマイクロバスで、まずフェリー乗り場近くの島北端、亀山へ登る。見晴らしは最高！気仙沼市内や唐桑半島、島の全景などが見渡せ、360 度のパノラマは、観光地「松島」を上回る感動。ガイドも名調子。

ガイドに聴き入る参加者

亀山のロープウエイ、焼けたまま

大島の歴史を、マルコポーロの黄金伝説から説き、暖流と寒流のぶつかる漁場の豊かさや、貿易や物流基地としての栄華、さらに明治三陸大津波での地名や史跡、高台移転などの教訓が昭和津波では生かされ、死者ゼロ。今回は、島が津波で２分割、死者３１名、の評価は厳しかった。ま

た、大島が防波堤の役を果たし、気仙沼市内には、他のリアス式海岸の各市・町の中では津波の高さが低く、被害の拡大を軽減した、という。
しかし、震災から約 1 週間、３０００人弱の島民は孤立。気仙沼市内からの援助も途絶えたままだった。逆に、震災直後、気仙沼市内から重油タンクが流失、炎上。対岸の大島まで流れ、山火事となり、その名残は、再開の目処が立たないロープウエイのゴンドラや、山頂付近の黒く焦げた跡のある木々。漁業と並び、観光が主産業には手痛い打撃。まだ震災前の観光客の水準には、遠く及ばない、という。

龍舞崎にて

美味しく頂きました。

その後、島南部の「龍舞岬」へ。ここも、津波被害で、「乙姫窟」など立ち入り禁止。
岬の先に見える小島のひとつに、枯れかかった松が一本。聞けば、小島も津波で飲み込まれ、生えていた樹木はことごとく無くなったので、まるで陸前高田の一本の松、のよう。
昼食は、近くの旅館「黒潮」。アワビ、フカヒレ、刺身、海藻、などで 1500 円。一同、満足。

午後 12 時 40 分　フェリーで気仙沼へ戻り、買物

フェリー乗り場近くにある「お魚いちば」で土産物を買い、発泡スチロールに新鮮な魚を詰め、バスの中は、土産で一杯。

午後２時　　気仙沼市内、鹿折（ししおり）地区へ

この地区は津波のあと、火災で焼失。気仙沼線鹿折唐桑駅の駅前交差点に流れ着いた３３０トンの大型漁船の座礁現場。市は後世の為に船の保存の方向を打ち出すが、一部住民は、この船に自宅が押しつぶされてゆくのを見ていて、「悔しい気持ちになる」と解体を主張。どこでも住民の主張通り、モニュメントとすべき建造物などが皆無くなった今、近くに出来た「復興マルシェ」（仮設商店街）のためにも、残すべき。次々と、車を止め、見に来る人は後を絶たず。

駅ホームから見た「第１８共徳丸」

午後３時　一ノ関インターから一路新宿へ。

東北自動車道に入ったところで、保田さんから、「気仙沼大島の民話」復刻本と、語り部のＣＤ、挿絵のポストカードなどを紹介頂き、また、南三陸町の中学生修学旅行費用支援の埼玉県ふじみ野市の元中学校長（そうは見えないが）の熊谷さんから託された「気仙沼被災写真集」や、宿泊した民宿近くのホタテ工場の三浦弘子さん中心に作っている「ホタテキャンドル」などを、「車内販売」。

多くの参加者が、こぞってお買い求め下さり、最後の支援活動終了。

午後９時　新宿駅にて全員無事解散。

Ⅶ　講演会

２月の中高 OB 会、５月の上智大学でのシンポ、７月の中大「白門４３会」での講演で、被災地の現状や、支援の必要性を訴えた。その後も、時折、求めに応じて講演活動を継続している。

２月２５日　聖光学院　シニア会のご案内

2011 年は当初より悲しい東日本大震災発生を受け、シニア会も開催出来ず、自粛モードで終始しました。復興にはまだまだ遠い道のりが待っています。聖光学院の在校生もボランティア活動に参加したと聞いております。シニア会メンバーでも、五期の齋藤大介君が宮城県亘理（わたり）町の現地ボランティアと組んで、半年間、支援物資送付と配布活動を行ってきました。このメンバーには彼の色々な仲間（聖光学院オーケストラの方も）の大勢の参加で、段ボール箱 1,000 個をゆうに超す物資が延 2400 人もの被災者へ配られ、被災者の方々から喜ばれました。また、2012 年からは、新たに三陸海岸各地（気仙沼、南三陸町、女川町など）の被災者への支援を開始するようです。

皆様も御存じの通り、被災地は復旧すら未だ果たせず、被災者は収入の道も閉ざされ、これからも息の長い支援が必要です。何よりこの震災の被害を忘れないことも大事なことと思います。そこで、今回のシニア会は、在校生の活動報告や、齋藤大介君の「誰でも参加出来る」支援活動を聴くようにしたいと思います。

開催日時：平成２４年２月２５日　午後５時３０分～

場　　所：聖光学院　食堂

５月２７日（日）　上智大卒業生カミングデー「被災者支援」シンポ

上智大の「オール　ソフィアンズ　ファエスティバル」で、「支援を考える」講演。

３号館３２５教室　　主催：上智大カトリック研究会 OB・OG

７月７日　白門４３会総会での講演

中央大学昭和４３年卒業生の会。支援仲間、Ｋさんの推薦で「支援活動」と、直前に同幹事の皆さんに同行した「被災地体感ツアー」の紹介。上野精養軒で。